

# 能代川水辺公園整備～楽新保広場・サケの路～

新潟地域振興局 新津支局地域整備部(平成16～18年度実施事業)

## 改修工事を県民参加で取り組んだ事例

### ◎事業の全体像

能代川の河川環境保全に配慮した改修事業を、県民参加で実施した事例。「能代川多自然型研究会」を設置し、改修計画を県民参加で作成。改修工事は、予算面での制約があったため、限られた予算の中で県と住民が役割分担して実施している。

### 事業の背景

能代川は平成12年7月洪水により、浸水家屋約700戸、浸水面積約1,000haに及ぶ被害を受けた。この対策として、全体事業費約480億にも上る能代川・小阿賀野川の災害関係事業が実施された。この結果、本支川含め、約32kmに渡り、河川改修が実施された。

平成9年に河川法が一部改正され、河川整備の目的に環境が加わった。能代川の災害復旧関係事業も河川環境に配慮した整備が計画されたが、事業実施にあたってはさまざまな課題があった。特に、河川環境の再生と新しく拡大する高水敷の管理は、緊急の問題であった。

そうした中、土木部で事務所ごとに実施している「地域における施策推進事業」で「能代川の河川環境保全」を取り上げ、新津土木事務所（現：新潟地域振興局新津支局地域整備部）を上げて取り組んでいくことにした。

### 多自然型研究会の設置

平成16年に「能代川多自然型研究会」を設置。能代川の魚をよく知っている「能代川サケマス増殖組合」「能代川の魚を考える会」「新津土木事務所（現：新潟地域振興局新津支局地域整備部）の職員」が加わり、事業実施中の能代川で「魚の住みやすい環境をどのように作り・再生させるか」について研究を始めた。

研究課題は集まったメンバーで選定した結果、「水際研究班」「青粘土対策班」「うまい能代川の魚を食べよう班」という3つとなり、サケ広場については、第3班が中心となって平成16年に素案を作成した。

また、平成17年は、第1班「辻川の河川整備計画」、第3班「サケ広場整備」の2テーマに絞り検討を進めていった。



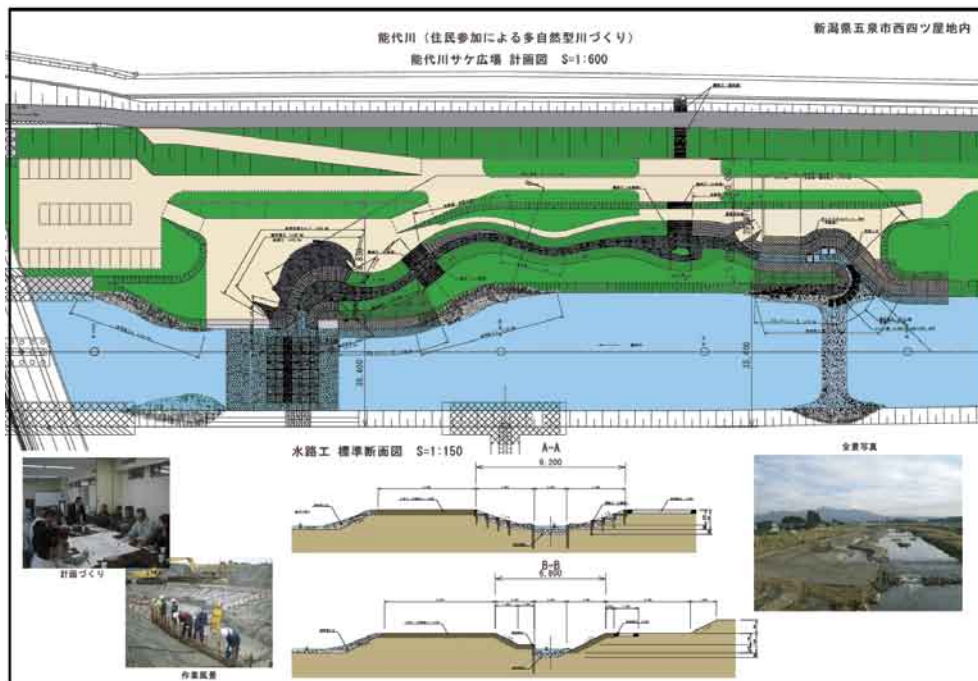
## 能代川プロジェクト

能代川の河川敷整備・堤防利用・河川の利活用を全て含めたプロジェクトの総称。能代川水辺公園整備の他に、リンリン道路（堤防のサイクリング道路整備）等も実施されている。また、沿川での住民活動も盛んに行われており、堤防に春は菜の花、秋はコスモスを植える活動（九十九曲の会）や、桜の植樹（新津桜の会）等が展開されている。

## サケ広場の計画

能代川の第2捷水路において、河床の急激な沈下を押し止めるため、床止め工が計画された。能代川多自然型研究会では、この床止め工の施工について、魚に優しい構造となるよう検討を行った。

併せて、旧能代川（今回の改修により辻川に付け替えられた）で実施していた一括採補について、「この床止め工を利用して、もっとサケの遡上するようすを観察してもらえそうな形にしたらどうか」との提案があり、平成16年に親水空間となる導水路を床止め工と併せて計画した。床止め工の施工にあたっては、粗朶沈床などの工法を用い、なるべくコンクリートを使わない工法を検討した。



## 予算的な制約

当初、県単河川整備費が使えるかどうか不明であったため、「我々でできることは自分たちでやってみよう」という意気込みで、計画づくりを行った。

その後、河川管理課・河川整備課の協力を得、導水路の取水口、排水口など、構造的に重要な部分と、導水路の掘削、底砂利投入、高水敷の歩道部・駐車場の敷き砂利などに県単河川整備費を充当してもらい施工した。それ以外の導水路については、4回にわたる手作り作業会を開催し、施工した。

## ポイント！

このプロジェクトは、県側の予算確保が不透明な中でのスタートであった。特筆すべきは、「予算が無いから出来ない」ではなく「自分たちでできることは、自分たちでやってみよう」という姿勢で最初からスタートしたことである。こうした前提条件を最初から明確にした上で計画づくりを進めたため、整備の際、「県と市民が役割分担して進める」ということが実現できたのである。

## 手作り作業会

### ポイント!

改修整備を実施する際は、コストを極力抑えるために、様々な工夫をした。部材は廃材を使用する、重機は研究会メンバー（造園関係者）からの提供（＝借りる）、石は隣の川で掘削したものを使用する等々。また、石積み作業の際は、チームエコのイベントとして開催するなど、知恵と工夫で整備を実施している。

親水階段工 3 基（L=18m、3 段）、粗朶柵工 L=50m、堤防階段工（L=3m、1 9 段）、石張り護岸 L=30m、自然石敷き並べ（サケの形）L=25m（松丸太廃材をもらい、これを所要の長さに切り分け、導水路に打ち込み番線で結束した。裏に吸い出し防止材を入れ、表面には玉石を張った。粗朶柵は丸太を打ち込み後、粗朶を編み込んでいった）

### <手作り作業会の開催状況>

作業準備会 8/27

第1回作業会 8/28

第2回作業会 9/17

第3回作業会 10/2

第4回作業会 10/16

のべ参加者約 170 名。作業は午前中 8:30～12:00 で実施。

（担当者からひとこと）

### 手作り作業会の裏話...

手作り作業会の実施にあたっては、事前準備が非常に大変であった（当日の作業工程・作業体制・役割分担等がある程度詰めておかねばならなかった）。また、作業の際、何かあったときに備え、しっかりと保険を掛けておくようにした。





### ポイント！

サケのつかみ取り大会は、土木PRという側面においても、参考になる要素を含んでいる。「食」に関連する催しは非常に集客力があるため、そうした催しをうまく利用して人を集め、併せて土木事業のPRを行うというのも、一つの方法である。

## サケ広場「サケのつかみ捕り大会」

竣工後毎年、サケのつかみ捕り大会が盛大に開催されている。

日時：11月中旬から下旬

場所：五泉市西四ツ屋（新保地区）新保大橋右岸上流河川敷

主催：能代川サケマス増殖組合

後援：新津地域振興調整会議／九十九曲がりの会、

内容：五泉市橋田小学校、村松町大蒲原小学校、村松小学校に案内を送付。さけやヤマメのつかみ捕りを行った。同時に、サケ汁・里芋汁・ちゃんちゃん焼き・サケ薫製などの料理が無料で振る舞われた。また、いくらの即売会なども実施した。漁協が開催する大規模なイベントとしては、子供たちにはとても好評であった。わずか3m程の川を、大量のサケが登る姿を間近にみるできるので、感動的。



## 一括採捕施設について



能代川を遡上したサケは床止め工に設置された「防い」によってそれ以上本川上流に遡上できなくなるため、導水路に誘導される。導水路を上ったサケは、採捕籠に導かれそこで捕獲される。そこで、雄と雌に分けられその後、村松町大蒲原にあるサケの孵化場で育成され、稚魚になったら放流される。

11月20日までは、信濃川の定置網により遡上する個体数が30～70匹/日であるが、それ以降は200匹/日も採捕されている。

本川を防いによって仕切っているが、降雨による増水により水深が深くなると防いを乗り越えて遡上するサケが相当数いる。今年は出水も多く、相当数のサケが防いを乗り越え能代川の上流で自然採卵している。能代川のサケは人工孵化により放流されたもので、能代川サケマス増殖組合に漁業権があり、一般の人が無許可で捕獲すると法律により罰せられる。

## 能代川水辺公園整備～楽新保広場・サケの路～のポイント

- 事業・予算ありきではなく、官民協働による研究会の設置からスタートした。
- 予算の確保が不透明である状況を明示・確認した上で、事業を推進していった。
- 予算不足を知恵と工夫そしてマンパワーでカバーしながら事業を進めた結果が、工事への県民参加につながった。